

ポイ捨てごみの行く末を想像しよう！ 境目を超える海のごみ、博多湾でも？！

九州大学大学院工学研究院環境社会部門生態工学研究室 准教授 清野聡子

海を漂流し、海岸に漂着する「海ごみ」。

川や街へのポイ捨て、処分場以外に捨てる不法投棄によるごみが、川を伝って海へと運ばれてきます。海の水はつながっていますから、人間が設定した地域境や国境を超えてごみは拡散し、海岸に襲ってきます。

そのため海岸清掃（ビーチクリーン）している人たちからは、「私が出したのではないごみを、なぜ私が拾わねばならないの？」と苦情が出ます。

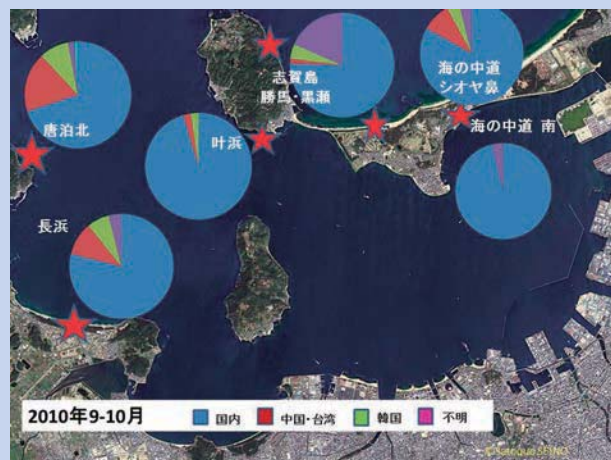
博多湾の奥の都市部の人口が集中している地域で、川や街にごみをポイ捨てる人たちは、そのごみの行く末で何が起きているかは想像してくれているのでしょうか？都市から博多湾へと流れ込んだごみは、潮の流れや干満によって湾口へと向かい、自然豊かな能古島や志賀島、海の中道の砂浜の博多湾側へと移動していきます。そして湾口から玄界灘へと外に出ると、今度は対馬暖流に乗って対馬や山陰地方へと北上したり、岸沿いの流れで佐賀や長崎へと南下したりと拡散していきます。また、湾口に漂っている間に、北風で吹き戻されて、福岡市西区や糸島半島に吹き寄せられるものも少なくありません。ごみが博多湾から出てしまうと、最悪の場合は、海峡を超えて太平洋まで流出して、さらに拡散してしまいます。

西区の沿岸部の今津や北崎は、美しい砂浜や磯に恵まれています。ところが人口が減って高齢化も進み、50年近く集落で行って来た浜掃除もままらなくなっています。ビーチクリーンは日常的には住民の方々だけでなく、中学生までもが頑張っています。そのため、福岡市全体で行うラブアースのように多くの方々が参加して下さるイベントはありがたいのです。

それにしても、特に人口が少ない場所では、どう考えても地元が出しているごみではありません。また、海外からのごみが有名になっていますが、日本のプラスチック系のごみが圧倒的に多いのです。

調査事例として、博多湾沿岸の海岸の漂着ペットボトルの国別割合を図に示します。調査結果によると、漂流ごみが夏の大雨で流出、漂着しやすい秋季では、外国製品からは多くても4割程度です。むしろ能古島より湾内はほとんどが日本製品のごみです。

国際的に越境してくるごみに苦情を申し立てる場合にも、「日本からだってごみがたくさん海に出ていて、うちの国にも漂着していますよ」と言われると、文句をいえる立場にはないのです。まずは足元の福岡から、自分のごみが海に出ってしまったら、どんな人が拾ってくれたり、困ったりしているのかな、という想像力を持てるようにしていきたいと思っています。



博多湾の海ごみ分布図

清野聡子(せい の さとこ)

九州大学大学院工学研究院環境社会部門生態工学研究室 准教授
農学修士(水産学)、博士(工学)

海岸や河川の生物の生息条件を中心に、環境保全と人間活動の両立の可能性を研究。専門は生態工学。幼少時から海岸の貝拾いが趣味で、現在はそれが研究になっている。漂着物を研究していたら、ごみ問題に直面。博多湾の海辺に在住、里山のキャンパスに研究室がある。

臨海3Rステーションイベント紹介 “ひろい”海の活動を終えて

平成28年9月11日(日)に臨海3Rステーションのイベント「“ひろい”海の活動」を行いました。福岡市東区箱崎の筥崎宮お潮井浜の海の中を、スノーケルを付けて観察しました。生き物観察の後、参加者全員で約40分ビーチクリーンを行いました。その結果、ごみ袋22個分のごみが集まりました。こんなに多くのごみが、観察したばかりの海に流れ着いていることにみんな驚いていました。一番多かったごみはペットボトル、次いで発泡スチロールの容器でした。これらの石油由来の製品は自然に戻りにくく、海に多く残ってしまいます。きちんと分別して出されたペットボトルなどのごみは資源として再利用されます。ごみを出す時は、きちんと分別しましょう。



観察会の様子

ビーチクリーンアップ

ごみをたくさん拾ったよ



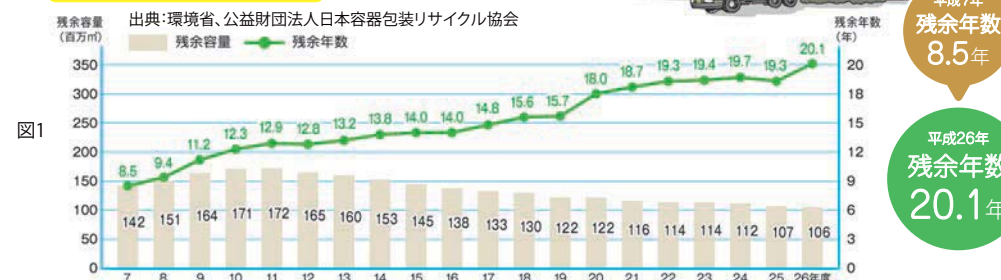
みんなで考えよう ごみの現状

ごみは焼却すると、気体と灰に形が変わります。その灰を埋め立てる場所、最終処分場の現状です(図1)。緩やかですが残余年数が年々増えることは、ごみが減っていることでもあります。もし20年後に最終処分場がいっぱいになったら、その後に出るごみはどこへいくのでしょうか。

レジ袋の辞退率も年々増えて、平成28年3月時点で52.05%(図2)。2人に1人がレジ袋を辞退していますが、それと同時にビニール袋の販売が増えています。

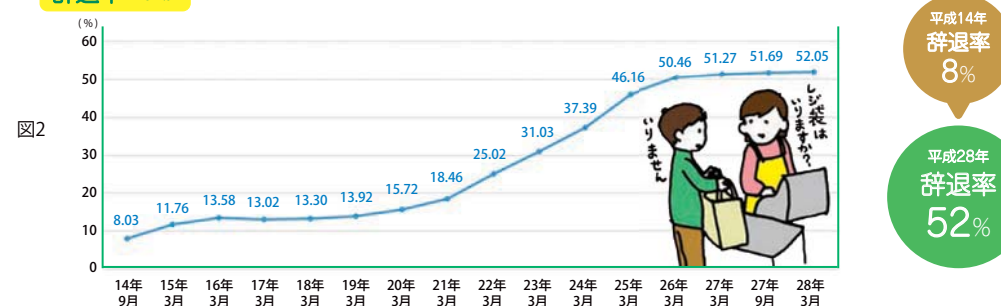
このように一見減っているように見えるごみも、違う角度から見るとまだまだ問題を含んでいます。ごみは一人一人の意識で減ったり、増えたりします。リデュース(発生抑制)を心掛けて、少しでも環境が良くなるごみ減らしを推進していきましょう。

一般廃棄物最終処分場の 残余容量・残余年数の推移



レジ袋の

辞退率の推移



平成7年
残余年数
8.5年

平成26年
残余年数
20.1年

平成14年
辞退率
8%

平成28年
辞退率
52%

コラム「愛縁機縁」 すき焼きの話

母の世代(大正世代)

物の無い時代を経験しているので、物を捨てなかつた。もったいないと言っては、何でもかでもため込んだ。

私の世代(昭和前半世代)

高度経済成長時代で世界中から物が輸入され、何でもかでも手に入れたがって、あふれる物に囲まれていた。

娘の世代(昭和後半～平成世代)

生まれた時から物に囲まれ、物のありがたさが希薄で不要になったら惜しげもなく捨てる。

忘れられない話がある。娘は中学生で、ある時、母親である私が夕食時に留守をすることになった。祖母は張り切って孫娘のために夕食の準備をした。「さあ、今夜はすき焼きよ」と祖母はウキウキとした声を娘にかけて台所からすき焼き鍋を両手に持って数歩前へ。突然、足元にすき焼き鍋がひっくり返った。当時の台所は土間作りで、食事をとる茶の間は一段上がっていた。アルミ製の平べったい鍋の片方の取っ手が外れていた。呆然となすすべもなく突っ立ったままの孫娘に祖母は慌てず騒がず「すき焼きの上の方だけ食べなさい。ぜんぜん汚くないんだから」。「さあ、用意した小鉢に卵を割り入れておいで。上の方のきれいなところだけ取ってあげるから」。「今夜は、すき焼きと思って別におかずは何も作ってないからね。これで食べなさい」。泣きたい気持ちで夕食を終えた娘は、折りにふれてこの話をする。

母いわく「鍋の取っ手がぐらついていたのは知っていたけど、家にある鉄のすき焼き鍋は重くてねえ。つい、昔使っていた鍋を引っ張り出してきたんだよ」。今では私もこの気持ちがよく分かるようになった。

アジアの片隅にありながらも、江戸時代以前より資源循環型の暮らしを確立し自給自足のシステムを構築して、少ない物を有効に利活用していた日本。敗戦国になって無一文から未曾有の金持ち国になり、世界中をあつといわせた日本。今また豊かさの頂点に立ちながら、使い捨てと増え続ける大量のごみに苦悶する日本。わずか1世紀の間に目まぐるしく環境が変わった日本人の暮らし。持てる資源を有効利活用し、潤いのある質素さで健康的な暮らしが求められていると思うのは私だけではないだろう。(鮎)